

研究発表もうしこみフォーム

氏名：渡邊三津子\*、滝口良、小長谷有紀、山中典和

氏名のローマ字表記：Mitsuko Watanabe, Ryo Takiguchi, Yuki Konagaya, Norikazu Yamanaka

所属：\*奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所 共生科学研究センター

専門分野：\*地理学、地域研究

発表のタイトル：古写真の比較分析に基づくウランバートルの景観変化検証の試み

発表要旨（600字～800字程度）：

写真や絵図・地図、スケッチ等の図像資料は、それ自体が歴史資料的価値を有するとともに、景観研究においては、過去の景観を考察するための材料として用いられてきた。特に写真は、撮影者の意図が介在してはいるもの、撮影当時の景観を詳細に記録した媒体である。

ある写真が撮影された場所を再訪し、被写体や景観を、同じ地点から、同じ方向、同じ角度で、異なった時期・時間に撮影することをリピート写真撮影（“repeat photography”または“rephotography”）という。リピート写真撮影により作成された新旧比較写真は、景観の変化を視覚的に示すことができるため、景観研究のツールとして有用である。しかし、過去の第三者が撮影した写真を元にリピート写真撮影を行うにあたっては、元になる古写真に付帯された撮影場所、対象（被写体）、撮影日時等、メタ情報の質や量によって作業の難易度が格段に異なる。景観が著しく変化しているような場合には、撮影場所が分からない古写真も多い一方で、町のランドマークと目される地物に関しては、異なった時期、異なった人が同じようなアングルで撮影していることも珍しくない。例えば、モンゴル国の首都ウランバートルについては、外国人旅行者、研究者やウランバートルに滞在した商人が撮影した膨大な量の写真が残されている。その中には現ザナバザル美術館及びその周辺を撮影した写真も含まれており、異なった撮影者が同じアングルから撮影した写真も複数存在する。このような場合には、同じ場所を訪れてリピート写真撮影を行わなくても、偶然の一致を利用して新旧比較写真のセットを作成できる。

本発表では、19世紀初頭から20世紀にかけて撮影された現ザナバザル美術館の写真素材とし、被写体となっている建物や道路の状況、行きかう人の服装やクルマの変化など、現ザナバザル美術館周辺の景観を構成する要素の変化を細かく読み取る作業を通して、対象地域の景観変化をより実態的、視覚的に示したい。